

雨森芳洲『橘窓茶話』に見える杜甫・白楽天

丹羽博之

要旨

雨森芳洲『橘窓茶話』に見える杜甫の「茅屋為秋風所破歌」、白楽天「新製綾襖成、感而有詠」(2893)詩の引用から、三者の漢詩を考察する。雨森芳洲は、杜詩・白詩の人民を思う詩に共感し、七十九歳になって、九歳の時の詩を改作している。杜詩から白詩への博愛の漢詩の流れを考察するとともに雨森芳洲の漢詩を読み解く。

キーワード…雨森芳洲・『橘窓茶話』・杜甫・白楽天

江戸中期の儒学者雨森芳洲（一六六八—一七五五）は、対馬藩に仕え、二度の朝鮮使節来日の際の応対等、対朝鮮外交に力を尽くしたことで有名である。韓国語を自由に操り、『交隣須知』等朝鮮関係の著書が多い。しかし、その一方で、当時の中国語も学び、漢文による著作も多い。彼が晩年著わした『橘窓茶話』に見える、九歳の時の詩を懐古し、改めて詩を詠じた話に登場する杜詩・白詩を考察し、併せて雨森芳洲の漢詩を考える。

第一章 『橘窓茶話』の杜詩・白詩

平井茂彦氏『雨森芳洲』（サンライズ出版・二〇〇四年一月）に『橘窓茶話』の次の件が紹介されている（稿者が買い求めた天明六「一七八六」年刊行の『橘窓茶話』には、該当する箇所が収められていない）。

○余九歳時作詩曰寒到夜前雪凍民安免愁我儕
猶可喜穿得好衣遊非不好也然念及凍民鮮有憫
恤之意似若安分而以好衣為言其為器也小矣嘗
觀杜少陵詩云安得廣廈千萬間大庇天下寒士俱
歡顏吾廬獨破受凍死亦足白樂天云百姓多寒無
可救身獨暖亦何情爭得大裘長万丈與君都蓋
洛陽城以予詩比之天壤間隔夫天稟高下根於自
然吾一生所得止於如此蓋有定于垂髫之時者固
不可得而掩飾也本詩云寒到夜前雪饑百姓何居
我等還有樂著好衣物遊當時平仄不知亦無文字
七十九歲改作韻語以示子孫云因作一絶曰兒日

新詩此日改ム只看ル點シテ鐵ヲ未タ成ラ金ト經ル年コト七十用ル工コト苦シム可レ
笑聰明絶ス古今ニ

杜少陵（杜甫）の詩とは、蜀に寄寓していた時の有名な七言古詩「茅屋為秋風所破歌（茅屋秋風の破るる所と為るの歌）」の末尾にある詩句であるが、原詩は

安得広厦千万間

安くにか広厦千万間を得て

大庇天下寒士俱歡顔

大いに天下の寒士を庇ひて 俱に顔を歡ばしめ

風雨不動安如山

風雨にも動かず 安きこと山の如くならん

嗚呼何時眼前突兀見此屋

嗚呼 何れの時か眼前に突兀とつこつとして此の屋を見れば

吾廬独破受凍死亦足

吾が廬は 独り破れて凍死を受くるも亦た足れり

（『杜詩詳註』卷十 以下杜詩は全て同書による。上元二「七六一」年 五十歳）

とあり、風雨以下の二句は省略されている。

白樂天の詩は、「新製綾襖成、感而有詠（新に綾襖を製して成る、感して詠有り）」（2893）の末尾で、原詩では、

百姓多寒無可救 百姓多く寒コゆるも 救ふ可き無し

一身独暖亦何情 一身独り暖かなるも 亦た何の情ぞ

心中為念農桑苦 心中 農桑の苦を念ふが為に

耳裏如聞飢凍声 耳裏 飢凍の声を聞くが如し

争得大裘長万丈 争いでか大裘の長さ万丈なるを得て

與君都蓋洛陽城 君が与なに都すて洛陽城を蓋はん

（『白氏文集』は「那波本」による。）

とあり、この詩も心中以下の二句が省略されている。杜詩は、自分の貧苦の経験を踏まえ、破れた茅屋から、天下の寒士を救う建物が欲し

いと述べる。あくまでも自分と同じ寒士が対象である。白詩の方は、太和五（八三一）年六十歳の時の作で河南尹という格式の高い官の身分であった。自分は飽食暖衣の身でありながら、治下の百姓の辛苦を思いやっている。白は若き日「新樂府」、「紅線毯」（0153）の中で、

宣城太守知不知 宣城太守 知るや知らずや

一丈毯千兩絲 一丈の毯 千兩の絲

地不知寒人要暖 地は寒を知らざるも 人は暖を要す

少奪人衣作地衣 人の衣を奪ひて地の衣と作すこと少かれ

と、無駄な費を戒めた。二十数年後、自分が綾襖を着る身になっても、若き日の百姓を思う気持ちを忘れてはいなかった。ましてや地衣を暖める事など彼には出来なかったであろう。杜甫は自分の住む破屋から白詩は自己の着る贅沢な綾襖からの連想であり、抛って立つ基盤は決定的に異なるが、白詩がこの杜詩を意識していたことは明かであろう。貧しき者が貧しき者を思うのは当然であろうが、白樂天のように高官になっても百姓の生活に思いを馳せる点を高く評価したい。河南尹という職務上当然といえはそれまでだが、多くの高官はそうではなかった。両者の共通性に気づいた芳洲の炯眼は評価すべきであろう。ただし、白詩が杜詩の兼濟精神を受けついだことは、宋代の『庚溪詩話』等にも指摘があり、芳洲はこれらの詩話類を読んでいた可能性もある（詳しくは付記①の中木論文参照）。

第二章 雨森芳洲の詩

次に、芳洲の漢詩を見ていく。九歳の時の作は、

寒到夜前雪 寒は到る 夜前の雪

凍民安免愁 凍民 安くんぞ愁ひを免がれん

我儕猶可喜 我が儕 猶ほ喜ぶべし

穿得好衣遊 好衣を穿ち得て遊ぶを

というもので、七十九歳になった芳洲は、「好からざるに非らざれど、凍民に思いが及ばず、憫恤の意少なく分に安んじているようで好衣着物を吹聴しており、器が小さい」と幼少期の作を懐古している。九歳の子どもに凍民の生活まで付度させるのは酷な気もするが、芳洲の人柄が窺える。詩は、愁・遊（共に下平声十一尤韻）と韻を踏んではいるが、「平仄不知」と自ら述べる如く、平仄は整っていない。七十年後の作は、

寒到夜前雪 寒は到る 夜前の雪

饑百姓何居 饑ゑたる百姓 何にとして居ん

我等還有樂 我等は 還た樂しみ有り

著好衣物遊 好き衣物を著け遊ぶ

というもので、承句で飢えたる民に思いをいたしており、杜甫・白樂天の詩に近づいている。寒気と衣服を詠む点において白詩に近いと言えよう。但し、これは前詩の承句「愁」を「居」に換えたため、韻も平仄も整っていない。一方、子孫に示した詩は、

兒日新詩此日改 兒日の新詩 此の日改む

只看點鐵未成金 只だ看る 鉄を点して未だ金と成らず

經年七十用工苦 年を経ること七十 工を用ることを苦しむ

可笑聰明絶古今 笑ふべし 聰明古今に絶することを

というもので、起句は韻を踏み落としているが、韻（下平十二侵韻）も平仄も整い、歴とした七言絶句である。起句に於いて、日が重なつて用いられているが、これは日を強調したもの。九歳の日の作を七十年後の今日改めたことを強める。なお、一句の中で同じ字を使い強調することについては、『一海知義の漢詩道場』（岩波書店、二六頁）参照。

第三章 杜甫・白楽天の博愛

十八世紀の日人雨森芳洲は、八・九世紀の唐人杜甫・白楽天の詩に通底する博愛精神に気づき、そのことを己の幼少期の詩とともに『橘窓茶話』に残した。稿者も以前に、『白楽天の博愛』（『大手前女子大学論集』三十二号、一九九九年二月）において、弱小なるものに対して同情するところに共通するものがあり、白詩の「贖雞」（0319）の詩は杜詩の「縛鷄行」を想起させる、と述べた。また、白詩の「放魚」（0059）も食べられる運命の魚を広い南湖に放つてやるという、生き物への愛情を詠んだものであることに触れた。

その後杜詩を読み進めるうちに、杜詩にも弱小の魚を詠んだ詩があることに気づいた。

白小

白小群分命 白小 群命みなめいを分かつ

天然二寸魚 天然 二寸の魚

細微露水族 細微にして 水族を露す

風俗当園蔬 風俗 園蔬えんそに当つ

入肆銀花乱 肆しに入れば 銀花乱る

傾箱雪片虚 箱を傾くれば 雪片虚し

生成猶拾作捨卵 生成 猶ほ卵を捨おくといふ

尽取義何如 尽く取るは 義何如

（『杜詩詳註』 卷十七 大暦元「七六六」年 五十五歳）

杜甫に微物を愛する面があることは已に『杜詩』（鈴木虎雄・黒川洋一訳注、岩波文庫 第八冊・一六六頁）に指摘がある。この他にも杜甫は「観打魚歌」「又観打魚歌」（卷十一、宝応元年綿州での作）等の詩ですなどりされる魚を憐れんでいる。

「放魚」詩は、長江のほとりの江州で詠まれている。滾々と流れ来る長江のその上流に、「白小」詩は詠まれた。蜀の夔州での作であり、地理的な親近感もあって詠まれたのであろうか。後に白は図らずも忠州刺史として赴任し、杜甫の過ごした近くに三年を過ごすことになる。前掲拙論において、小さな弱い生き物へのこまやかな愛の詩が曾て中国古典詩で詠まれたのであろうか、と述べたが、白樂天も高く評価した杜詩に已に存在していた。白は「新樂府」「秦中吟」等において杜詩の社会性を受け継いだが、同時に小動物への同情を詠むことも学んだのであろう。「新樂府」等に見える弱者救済の精神と「贖雞」詩等に見える小動物への博愛精神には通底するものがあることは前掲拙論で述べた。この度『橘窓茶話』を読み、白樂天は杜甫の詩から多大の影響を受けたことを改めて認識した。

この三者に共通するのは、弱者への暖かい眼差しである。杜甫は晩年貧困と老病にあえぎ、本人自身が社会的弱者に近かったのに、貧士に思いを馳せており、弱者であったからこそその思いやりと言えるかも知れない。一方、白樂天は経済的に大変恵まれていたのも拘わらず、若き日の貧しさを忘れていなかったのであろう。齢六十を過ぎ、河南尹という高官になってからも若い時の兼済の精神は持ち続けていた。雨森芳洲も為政者側の立場として、仁愛の精神を八十近くになっても持ち続けた。彼は江戸期日朝外交の面での業績が高く評価されているが、彼の眼差しは朝鮮にのみとどまらず、広く東アジアにも向けられていた。

付記

①書齋にある佐久節註解『白樂天全集』（国訳本）の「新製綾襖成、感而有詠」の箇所をみると、朱鉛筆で最後の二句の上に、「杜甫」のメモがあった。已に稿者も何年か前に杜詩と白詩の関係は気づいていたようだが、その後放念していた。今回、図らずも、『橘窓茶話』を読み、今回の考察ができた。なお、この杜詩と白詩については、近年左記の論がある。

中木愛「白居易の幸福意識——「新製布裘」「醉後狂言」「新製綾襖成」三首を中心に——」（『中国中世文学研究 四十周年記念論文集』二〇〇一年十月）

川合康三「廣廈千萬間——杜甫と白居易」（『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』二〇〇六年三月）
下定雅弘「白詩の衣服表現に見る『兼済』と『独善』——裘・衣食の衣・葛衣など——」（『白居易研究年報』七号、二〇〇六年十月）

雨森芳洲『橘窓茶話』に見える杜甫・白樂天

②原稿締め切り直前に、

大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせて

〔後撰和歌集〕 卷二・春中・64・よみ人しらず・『新撰万葉集』 卷下・春

の歌と前掲白詩の「争得大裘長万丈、與君都蓋洛陽城」の關係に気づいた。このことについては、慈円の有名な

おほけなくうき世の民をおほふかなわが立つ袖の墨染めの袖

の歌とともに、先行研究の有無を調べた上で、稿を改めて考えたい。

謝 辞

本稿は二〇〇五年大手前大学人文科学部交流文化科学外授業の一環として、雨森芳洲記念館を見学したことが一つの契機となった（稿者は学会で不参加）。計画立案し、種々資料を提供していただいた張起權（チャン・キグオン）大手前大学教授に、記して御礼申し上げます。後日同記念館来訪の際、平井茂彦館長より貴重な資料の提供を受けた。併せて御礼申し上げます。